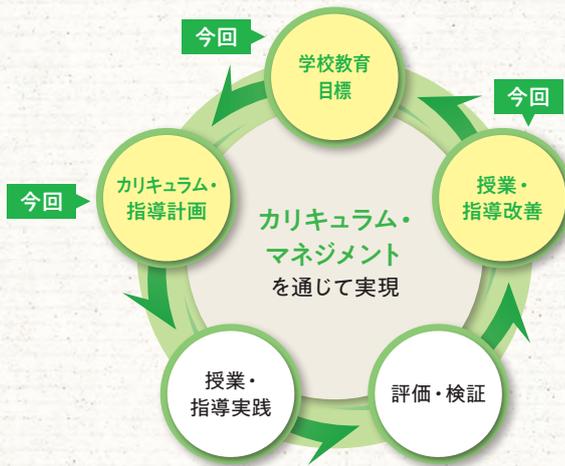


育成を目指す資質・能力の設定と「対話」を軸に、授業改善の方向性を見いだす

長崎県立佐世保西高校



◎校訓は「自主自律」「積極敢為」「親和協調」。単位制による多様な選択科目と習熟度別授業で生徒の進路実現を支援する。より高いレベルの授業を希望する生徒のために、1年次より「ウィングクラス」を編成。ハンドボール部、ソフトボール部などの部活動も盛ん。

◎設立 1964 (昭和 39) 年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約 240 人

◎2020年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、京都大、広島大、九州大、長崎大、北九州市立大などに118人が合格。私立大は、同志社大、近畿大、西南学院大、福岡大などに延べ214人が合格。

◎URL <http://www.news.ed.jp/sasebonishi-h/>



授業改善には 目的の明確化が必要

育成を目指す資質・能力を設定し、その育成のための「授業改善プロジェクト2020」(図1)を始動させた長崎県立佐世保西高校。学校全体で授業改善の動きが始まったのは、2017年度、宅島健司校長が同校に赴任してからだ。

「生徒の主体性を育むため、そして教師の働き方改革を進めるため、家庭学習や課題・補習を重視した指導スタイルから脱却し、授業改善を進めていきたいと考えました。教師からの知識・技能の教授だけでなく、生徒がじっくり考えたり、協働したりと、多様な活動を通して学びを深め、次の学びへの意欲を引き出すことが、これからの学校には求められ、職員会議などで繰り返し話をして理解を求めました」

18年度には、長崎県が実施する、資質・能力の育成のための指導改善プロジェクトの研究指定校となり、授業改善の取り組みは一気に広まったと、舟越裕教頭は振り返る。

「教科主任を中心に構成した授業改善プロジェクトチームが推進役と

なり、各教科で授業互観などを進めたことで、「目標設定↓活動↓振り返り」という授業スタイルが一般化されました」

生徒同士の対話や協働的な問題解決の場面が多く取り入れられるなど、授業は明らかに変わっていったが、それと同時に、「何のための授業改善なのかを、もっと話し合うことが必要なのではないか」といった声が、教師たちから上がってきた。ちょうど18年度末に、VIEW21編集部が主催したカリキュラム・マネジメントに関するワークショップ(*1)に参加し、学校教育目標の明確化の重要性を痛感した舟越教頭は、宅島校長に「授業を通じて身につける力」を学校全体で話し合い、設定していくことを提案した。

「高校改革が進む中で、佐世保西高校はどんな学校でありたいと思っているのか、すべての教師がそれを生徒や保護者に明確に語ることで、きて初めて、目指すべき授業が見えてくると考えました。宅島校長も、「授業改善をより本質的なものとするためにも、未来を見通した学校像の言語化が必要だ」と、育成を目指す資質・能力の設定を学校全体での

*1 ワークショップの内容は、本誌2019年6月号・特集に掲載。



松本優梨
キャリア支援部
まつもと・りゅうり
教職歴5年。同校に赴任して3年
目。家庭科。



小佐々慎也
進路指導主事
こさざ・しんや
教職歴14年。同校に赴任して2年
目。キャリア支援部。数学科。



峯悦子
3学年主任
みね・えつこ
教職歴16年。同校に赴任して4年
目。キャリア支援部。国語科。



上野博
生徒会指導部主任
うえの・ひろし
教職歴16年。同校に赴任して
5年目。保健体育科。



三好啓介
教務主任
みよし・けいすけ
教職歴19年。同校に赴任して
3年目。理科(生物)。



舟越裕
教頭
ふなこし・ひろし
教職歴25年。同校に赴任して
3年目。



校長 宅島健司
たくしま・けんじ
教職歴31年。同校に赴任して
4年目。

取り組みとすることに賛同してくだ
さいました」(舟越教頭)

全教師による対話を経て 資質・能力を設定

19年度、各教科の若手教師で再編
成された授業改善プロジェクトチー
ムの主導で、育成を目指す資質・能
力の全教師での検討が始まった。同
校の強みや弱みを洗い出した上で、
育てたい生徒像と育成を目指す資
質・能力について意見を出し合い、
それらを、各分掌の副主任を中心と
した若手検討チームで集約していっ
た。進路指導部から同チームに参加
した進路指導主事の小佐々慎也先生
は、全教師の意見が土台となったこ
とに意味があったと語る。

「全教師の意見から共通点を見い
だし、9つの資質・能力に集約しま
した(図1中央)。漠然とイメージ
していた本校の生徒に必要な資質・
能力でしたが、どの先生も同じよう
なことを考えていたのだと分かり、
全教師が納得する教育目標として言
語化することができました」

生徒会指導部主任の上野博先生
は、対話を通して教師がつながって

いくことを感じた
という。

「教科やキャリ
アを超えた対話の
中で、先生方のい
ろいろな考えを知
ることができまし
た。これからは、
同僚ともっと対話
をするべきだと思
いました」

さらに若手検討
チームは、学校と
して9つの資質・
能力をどのように
育成していくのか
を、教育活動の具
体例で明示するこ
とにした。そこで、

各教科団に授業で生徒にどのような
活動に取り組ませるのかを検討して
もらい、学年団には各資質・能力の
育成に寄与すると思われる行事を考
えてもらった。

大きな目標を、言わば絵に描いた
餅に終わらせないよう、日々の教育
活動とひもづけしていく取り組みだ
が、その取り組みの必要性は、多く
の教師が実感していたはずだと、教

図1 授業改善プロジェクト2020



* 学校資料をそのまま掲載。

務主任で授業改善プロジェクトチー
ムのリーダーである三好啓介先生は
語る。

「19年度は県の研究指定は終了し
ていましたが、授業改善プロジェクト
トは、資質・能力の検討と並行して
継続して行いました。18年度は教科団
主体の活動でしたが、19年度は担当
教科を超えたグループで前年度より
も人数が多い7、8人の構成に変更

図3 育成を目指す資質・能力と、それにひもづく各教科・学校行事で展開する教育活動例

佐世保西高で「どのような生徒を育成するか」(育成したい資質・能力)

育成したい資質・能力	〇〇力を身に付けさせるためにどのような授業を展開するか(各教科)													どのような学校行事で育成するか			
	国語	地理公民	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	保健体育	家庭	情報	研究科関係	教務部		生徒指導部	進路指導部	生徒会指導部
探究力	学習における基礎・基本を徹底し、問題解決に役立てることができる力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力												
プレゼン力	ものごとを自分の言葉で分かりやすく伝えられること	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力												
対話力	他者と意思疎通をはかること、自分と向き合うことができる力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力												
論理的思考力	因果関係を整理し、順序立てて考えることができる力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力												
批判的思考力	常識にとらわれず、多角的に考えることができる力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力												
意思決定力	目標を達成するために、複数の選択肢の中から最適なものを選ぶことができる力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力												
自己管理能力	自分の生活や行動をコントロールできる力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力												
探究力	ものごとの本質・本質について前向きに考えることができる力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力												
協働力	集団に於いての目標を共有し、ともに活動することができる力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力	自分の考えを表現する力												

*学校資料をそのまま掲載。

し、授業互観に取り組みました。ところが、教科を超えて共通して育成を目指す資質・能力を明確化できていない状態では、授業互観の後の教師同士の振り返りが活発にならなかったのです。教科を超えて授業改善に取り組みのであれば、どのような授業でどんな資質・能力を育成するのかを共有しておく必要があります。そうしなければ、授業での発問が適切だったのかを検討することもできないと思いました」

授業互観が有意義な振り返りに結びつかず、授業改善の取り組みが進まなかったことは、19年度末の生徒アンケート(図2)の結果にも表れていた。学校教育目標として掲げた9つの資質・能力をどのような授業や学校行事で育成するのかを明らかにして、それを全教師で共有することが急務となっていた。

資質・能力の設定で授業改善の方向性が見えた

資質・能力の育成のための授業・学校行事の改善の具体的な視点は、20年3月、校内で共有された(図3)。それによって、各教師の授業改善が

図2 授業に関する生徒アンケート(1年生)

各質問項目の4・3の割合(%) (4:強く思う、3:そう思う)	2019	2018
授業は、生徒が1人でじっくり考える時間がある。	67.0	80.3
授業は、生徒がグループやペアで話し合ったり、教え合ったりする時間がある。	78.4	92.8
授業は、グループで問題解決をする時間がある。	55.4	80.7
授業は、1人が全体に向けて説明をしたり、プレゼンしたりする時間がある。	17.7	31.4

2018・19年度に生徒に行ったアンケートの一部。19年度は前年度に比べて、授業改善の動きが停滞していることが明らかになった。
*学校資料を基に編集部で作成。

大きく後押しされたこと、3学年主任の峯悦子先生(*2)は語る。「これまで、生徒同士の対話を盛り込んだ授業の実践を校内に共有しても、『対話よりも知識を注入する方が大切ではないか』といった声が聞かれました。内心は生徒主体の活動を通じた学びの大切さを理解していても、まだ確信が持てない先生が、そうした声を発していたのだと思います。しかし、資質・能力の設定とそれを育成するための授業について話し合ったことで、自信を持って授業改善に取り組むことができるようになりました」

20年度は、同校も新型コロナウイルス

*2 本誌2019年度4月号「実践 アクティブ・ラーニング」P.34-37で峯先生の古文の授業実践を掲載。

図4 授業改善に取り組む、教科の枠を超えた小グループ活動

2020年度、佐世保西高校では、担当教科が異なる4、5人の教師で構成される小グループをつくり、協働的に授業改善に取り組んでいる。まず、小グループ内で、学校として育成を目指す資質・能力を念頭に置いた上で、各自の授業における課題と目指す授業のあり方、グループ全員で取り組む共通のテーマを、右のポートフォリオを使って共有する。すべての小グループにおいて、週1回、メンバー全員が授業のない共通の時間が設けられており、その時間で授業改善について話し合いを行っている。

下の写真は、7月に行われた国語、数学、英語、音楽の4人の教師から成る小グループ活動の様子。お互いの授業における課題を話し合う中で、「生徒を信じて、自ら取り組ませてみる授業」が共通のテーマに決まり、「生徒の話し合いや熟考の時間を確保するため、スライドなどを使うことによる板書の時間の圧縮」が、目指す授業の実現のための具体的な課題として挙げた。早速、必要なノウハウを学び合おうということになり、1週間後、音楽の教師が講師になって、プレゼンテーションソフトを活用した教材づくりの講習を行うことが決まった。



授業改善チームOPP (ワンメンバーポートフォリオ)

【STEP1】 授業改善の視点を共有する (6~7月)

名前	改善の視点

小グループのメンバー全員が自分の授業における課題を共有し、共通の目標を設定する

【STEP2】 授業を互観する (9~11月) ①授業観察作例 ②授業互観 ③授業の振り返り会

授業者	公開授業日	授業互観に対する感想(振り返り会での共有)	授業者の感想
	月 日		
	月 日		
	月 日		
	月 日		
	月 日		

授業互観における気づきを共有

【STEP3】 次年度に向けた取組 (1~2月) ①授業アンケート結果 ②次年度の授業改善の方策

名前	生徒の声(授業アンケート結果の要点)	次年度はどんな授業に挑戦したい

生徒の授業アンケートの結果から分かったこと、次年度の課題もグループで共有

*学校資料をそのまま掲載。

ルスの感染拡大を受けた臨時休業という予期せぬ事態でスタートしたが、資質・能力の育成のための授業・学校行事の改善の具体的な視点が明らかになったことで、困難な状況の中でも指導の軸が自分に生まれたと峯先生は話す。

「授業時数が少なくなったので、国語では取り組ませることはなかった予習を生徒に課しています。その内容は、知識を増やすだけのものではなく、教師の手助けがなくても論理的思考力を発揮できるように工夫しています。また、生徒の理解度をきめ細かく把握するために、課題の回収・添削の頻度も高まりました。それも、国語科内で論理的思考力の育成を重視しようという方針が明確になった結果だと思っています」

今年度は、担当教科が異なる4、5人の教師で小グループをつくり、授業改善の方針を検討している。前年度よりもグループの人数を減らしたのは、授業互観後の振り返りなどにおけるコミュニケーションを密にするためだ。今後、グループ内で各自の課題をポートフォリオにまとめ共有し、協働的に授業改善を進めていくことになる(図4)。

育成した資質・能力を探究学習で発揮

資質・能力の育成において軸となる教育活動が「総合的な探究の時間」だ(P.35 図1右)。同校は、「ふるさと創生」をテーマとした地域課題研究を18年度から実施しているが、キャリア支援部の松本優梨先生は、「各教科で身につけた資質・能力を発揮する場として探究学習に取り組むことで、教科学習への主体性が高まる」と、探究学習の重要性を語る。

「臨時休業があったため、授業時間の確保に苦心していますが、これまでの探究学習での生徒の大きな成長を思い返すと、生徒の学びを豊かなものにする機会として、探究学習はおろそかにできないと思います」

20年度の授業改善の成果は、各教師が年度末の管理職との面談で、さらにそこでの気づきを小グループで共有して、次年度以降の全校的な授業改善にもつなげる予定だ。管理職が発信した授業改善の願いを、中堅・若手が主体となって実現しようとしている佐世保西高校。教師が一体となった「未来を見据えた学校づくり」は今後も続いていく。